

5. 実証研究で得られた成果

(1)「C o C o L o (こころ) の教育」に掲げる育成したい九つの資質・能力をバランス良く伸ばすことについて

【ループリック評価の分析】

※生徒と教職員に対して年度初と年度末にループリック評価を実施し、次のような結果が得られた。今年度の目標は、育成したい九つの資質・能力のうち、五つの資質・能力（他者理解力、人間関係形成力、地域文化理解力、社会参画力、課題発見解決力）について、各学年0.3ポイント上昇させることであった。

ループリック評価 ※網掛けは、今年度の目標項目

学年	自己理解力	他者理解力	人間関係形成力	地域文化理解力	キャリア実践力	社会参画力	知識力	創造力	課題発見解決力	平均
1年生										
年度初	2.8	3.4	2.9	2.2	2.5	2.0	2.2	2.1	2.4	2.5
年度末	3.0	3.4	3.1	2.3	2.5	2.3	2.6	2.5	2.5	2.7
比較	0.2	0.0	0.2	0.1	0.0	0.3	0.4	0.4	0.1	0.2
2年生										
年度初	2.7	3.2	3.0	2.2	2.1	2.2	2.5	2.3	2.3	2.5
年度末	3.0	3.3	3.3	2.7	2.7	2.5	2.7	2.7	2.7	2.8
比較	0.3	0.1	0.3	0.5	0.6	0.3	0.2	0.4	0.4	0.3
3年生										
年度初	2.6	3.2	2.9	1.9	2.3	2.0	2.2	2.1	2.1	2.4
年度末	3.2	3.6	3.4	2.8	3.2	2.9	3.0	2.9	2.9	3.1
比較	0.6	0.4	0.5	0.9	0.9	0.9	0.8	0.8	0.8	0.7
1年教員										
年度初	1.9	1.6	1.9	1.3	1.6	1.3	1.4	1.3	1.2	1.5
年度末	2.7	2.4	2.5	1.8	2.4	2.1	2.2	1.8	1.9	2.2
比較	0.8	0.8	0.6	0.5	0.8	0.8	0.8	0.5	0.7	0.7
2年教員										
年度初	2.0	1.9	1.9	1.5	1.9	1.4	1.7	1.4	1.7	1.7
年度末	3.2	3.2	3.2	2.5	2.7	2.6	2.7	2.8	2.6	2.9
比較	1.2	1.3	1.3	0.9	0.8	1.4	1	1.4	0.9	1.1
3年教員										
年度初	2.9	2.6	2.7	2.0	1.9	2.1	2.2	2.0	2.0	2.3
年度末	3.4	3.5	3.5	2.8	3.3	3.3	2.8	2.8	2.7	3.1
比較	0.5	0.9	0.8	0.8	1.5	1.2	0.6	0.8	0.7	0.9

分析表から生徒も教職員も伸び率に差があるものの、総じてどの資質・能力も向上しており、九つの資質・能力を概ねバランスよく伸ばすことができているといえる。

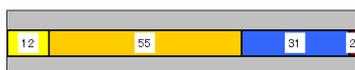
中でも地域を教育フィールドにしている観点から、地域文化理解力と社会参画力の生徒評価に着目してみると、地域文化理解力の伸び率は、1年生0.1ポイント、2年生は0.5ポイント、3年生は0.9ポイント、社会参画力の伸び率は、1・2年生は0.3ポイント、3年生は0.9ポイントといずれも学年が上がるにつれて伸び率が大きくなる傾向を示している。このことから、発達段階に応じた「C o C o L o (こころ) の教育」の浸透の成果が一見できる。

しかし、この二つの資質・能力は、いずれも卒業までに求めるレベル3を年度末データで満たしておらず、1・2年生で六つ、3年生で四つの資質・能力でも満たしていない。

この要因は、次の学校自己評価アンケートの「地域文化理解力に学習への対応」の問いに対する回答から見て取れる。この問いに対する肯定的回答が、教職員66.7%、保護者54.8%、特に生徒36.9%とかなり低い。このことから、地域文化理解力や社会参画力の向上は、地域を教育フィールドにした学習活動だけではなく、本校教育課程や学校グランド・デザインに位置付け、教育全体計画の見直しを図らなければならない。特に各教科での地域を題材にした教材開発など、教科の特性を生かした授業づくりが必要となる。

（学校自己評価アンケート：地域文化理解力）

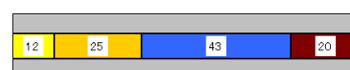
【教職員】学習活動を通して地域の課題について考えさせるように適切な指導を行っている。



【保護者】お子様は、学校で地域の課題について学習している。



【生徒】自分は、授業中に地域の課題について考えることがある。



回答選択肢

はい・そう思う

だいたいそう思う

あまりそう思わない

いいえ・そう思わない

わからない、無回答

*保護者のみ

【GROW UPシート評価の分析】

※今年度は、学校グランドデザインの「どのように学ぶか（教育課程の実施等）」に掲げた。

学校行事等に加えて、本実践研究の中で地域を教育フィールドにしたボランティア活動においてもGROW UPシートを活用した。その結果と振り返りの記述は、次表のとおりである。

行事	目標を上回る	目標達成	目標を上回った項目・数/総数
港フェスティバル	9.3%	74.0%	他者理解力 1、人間関係形成力 10、地域文化理解力 6、課題発見解決力 2/14
オープンスクール	11.5%	76.9%	人間関係形成力 3/3
ビーチサッカー	7.4%	63.0%	人間関係形成力 2、課題発見解決力 1/2
インターンシップ	6.7%	77.0%	人間関係形成力 7、社会参画力 1、課題発見解決力 2/9
キッズビジネスタウン(2年)	16.5%	82.0%	人間関係形成力 16、社会参画力 12、課題発見解決力 12/22
キッズビジネスタウン(3年)	21.1%	85.5%	人間関係形成力 19、社会参画力 16、課題発見解決力 14/32

※目標達成とは、行事後評価が行事前評価と同じか上回った生徒の割合。目標を上回るとは、行事後評価が行事前評価より上回った生徒の割合である。目標を上回った項目・数/総数とは、目標を上回った生徒の総数のうち、目標を上回った項目と数である。

一回の活動ですぐに結果を求めることは難しいが、事前に目標を定め、事後に振り返ることにより、学校行事やボランティア活動に意欲的に取り組むようになっていくことがわかる。ここでも、社会参画力の向上が顕著に見られるのと同時に、課題発見解決力も伸びたと生徒が感じていることに注目したい。

（GROW UPシート 生徒記述から）

（キッズビジネスタウンたまの）

- ・小学生と協力して商品が売ることができ、主体的に取り組むことができた。自分に何が足りないか改善点が見つかった。
 - ・小学生のお手本になれるように、自分から話しかけることができた。
 - ・小学生に指示したこと以外の気づいたことを教えることができ、課題を見つけ解決方法を考えた。
 - ・場所がわからない人に、言葉遣いに気をつけて案内でき、この取組の意義が理解できた。自分が担当したところは、工夫してすることができた。
 - ・小学生に適切な言葉で対応でき、地域の人ともコミュニケーションがとれた。
 - ・小学生の目線にたって上手に連携してブースの仕事に取り組めた。
 - ・小学生に優しく教え、楽しく話ができて、社会的な取組を理解することができた。
- 将来について、課題を見つけることができた。

特に「キッズビジネスタウンたまの」は、小中学生や保護者など異世代間が地域を巻き込んで交流する活動であり、その傾向が強くうかがわれる。前述のように、今後、「キッズビジネスタウンたまの」を生徒主体で改善していく予定であるが、このような地域との協働の取組が、生徒の社会参画力や課題発見解決力以外の資質・能力向上につながるよう仕掛けていくことが課題である。

【学校運営協議会や研究推進協議会での地域からの意見】

地域と学校の連携を進めるに当たり、今後一層の事業拡大を協議する上での参考として、年度初と年度末に、学校運営協議会委員及び研究推進協議会委員を対象に、本校に対する意識調査（資料参照）を実施し、次のような結果を得た。

- ・すべての質問項目に対する肯定的回答の割合（平均）は、年度初78.2%から年度末93.2%に大幅に上昇した。
- ・年度末ではすべての質問項目のうち3項目が、肯定的回答が100%になった。
- ・委員による学校行事への参加回数5回、授業参観への参加回数は3回であった。
- ・学校の教育活動に対する肯定的な意見を集約できた。

ただし、この結果は、コミュニティ・スクールの導入により期待する効果の一つ「取組の方向性に係る地域との共有と熟成」について、「始まりの始まり」であることに留意する必要があると考えている。

（「C o C o L o（こころ）の教育」への意見記述から）

- ・小学生は高校生とのふれあいの中で、高校生への憧れができる。小学生はキャリアパスポートに書ける。高校生の自己肯定感も上がると思う。交流も含めてキャリア教育につなげていきたい。
- ・高校生は課題解決型ボランティアにするのがよい。自分の町の問題点を発見し、解決策を提案し、ボランティア活動につなげ貢献する。また、ボランティアをすることによって、マナーやコミュニケーションも身につく。1年生から全員ボランティアに参加し、地域を知ることが大切。イベントなどを考えてもおもしろい。
- ・組織的な地域連携について、コンソーシアムを構築する必要がある。そのためには、地域に玉野商工の生徒にどんな力をつけさせるのか十分伝える必要がある。

以上の様々な「C o C o L o（こころ）の教育」への評価から、学校に多様な人々が関わっていくことで、多くの大人の専門性や地域の力を生かした教育活動等が実施され、学校での学びがより豊かに、広がりをもったものとなり、生徒の学びが充実すること、信頼できる大人と多くの関わりをもち、愛情を注がれることにより、自己肯定感や他人を思いやる心など豊かな心が育まれていると思われる。生徒から「地域の人と一緒に活動して、感謝を学ぶことができた」「地域で活動して、街を良くする方法があると感じる機会になった」という声が聞かれるなど、地域の人々に支えられ学んでいくことで、地域への愛着が芽生え、地域の担い手としての自覚が育まれていると考える。

（2）コミュニティ・スクール等の仕組みを活かした学校と地域社会の持続可能な連携・協働体制のモデル構築について

【学校評議員会から学校運営協議会への移行の促進】

学校の教育活動に対し様々な角度や多様な見方からの意見をもらうことで、教育活動や地域連携に関する点検や見直しを図り、教職員や保護者・地域の人々のコミュニティ・スクールに対する意識づくりを促進できた。

学校運営協議会の必須機能である学校運営の基本方針の承認は、計画の段階から地域の人々や保護者等の参画を得た学校運営ができ、校長の異動があっても持続的な学校運営が図られる点で意義があることが再認識できた。

【WGを通じた地域学校協働活動への参加促進（学校運営協議会を熟議の場に）】

本実践研究では、学校運営協議会の委員について、学校のミッションや取組の方向性に即して選定し（「テーマ・コミュニティ」）、企業連携、小中学校との連携、地域ボランティア活動連携という視点から三つのWGに分けて、広く意見を求めた。これにより、地域の意見をより学校運営の改善や具体的な取組に反映しやすくなった。学校運営協議会を、熟議（熟慮と議論）の場にすることが重要であることを改めて実感した。熟議の仕組みの構築により、地域による学校への支援の拡大や、風通しのよい学校運営、学校・家庭・地域の持続的な信頼関係の構築につなげることが期待できる。そのためにも、委員は、前述のような「テーマ・コミュニティ」に基づいて選定するのが望ましく、学校が立地する自治体（市町村）にこだわる必要はないと考える。

教職員の意識については、学校運営協議会に参画した教職員は学校運営への改善意識が高まったが、直接参画しなかった教職員の意識の醸成は課題である。今後は、全教職員が、いずれかのWGに属するような体制の構築も一考に値すると思われる。

【学校運営協議会等への生徒の参加】

生徒を学校運営協議会やWGに参加させることにより、地域社会を構成する当事者としての役割と責任を自覚させることができる。また、生徒による主体的・自主的な社会貢献活動や学習活動を取り込むことにより、学校運営の質的改善に向けたPDCAサイクルを持続的に確立しやすくなると思われる。また、地域の「大人」にとっても、生徒と意見を交わすことが、自らの役割と責任を再認識する機会になったと思われる。

課題として次の二点を挙げるができる。

- ・どの生徒を、どの場面で、どのように参加させるか。
- ・生徒全体の動きとして、どのように意識の醸成を図るか。

今後、恒常的に学校運営協議会に参加し、全校生徒の先導役となるような組織（生徒実行委員会（C o C o L o 委員会））のような組織を検討する必要がある。